

情報技術者と社会 第15回レポート

ソフトウェア科学コース

09B22084 山久保孝亮

2025 年 1 月 28 日

1 Creative Commons が利用されている事例

Creative Commons は、限定された権利を提供するライセンス方式のことであり、著作者は条件を守っている限り自由に使っても良いという意思表示をすることができる。[1]

Creative Commons が利用されている事例としては、生命科学系データベースアーカイブが挙げられる。[2] 生命科学分野ではデータの所在や利用条件がわかりにくい点、使用しにくいという点と研究プロジェクトが終了するとデータベースが維持されないという問題点があった。そこで、生命科学系データベースアーカイブはクリエイティブ・コモンズ・ライセンス CC BY-SA() を採用した。これを採用した理由としては、以下の理由があげられる。

- データベース寄託者のクレジット確保という要望に応えることができる一方で、データベース利用者にとって利用条件や権利者が明確になり許諾の確認コスト削減を狙える点。
- 派生物を公開する際、同様に自由に利用できるライセンスであることが望ましい点。

生命科学データベースアーカイブには簡易検索機能なども存在し、データの使い勝手の良さにこだわった作りとなっている。

2 Creative Commons による著作物の公開の将来について

私は Creative Commons による著作物の公開は、今後さらに拡大していくと考えた。理由は以下の二点である。

- 一つ目の理由は、機械学習における著作権の管理コストの削減につながるためである。昨今、機械学習や AI への関心が高まりつつあり、様々な分野において利用されている。しかし、機械学習を使用するためにはデータセットが必要である場合があり、そのデータセットはどのような範囲で利用してよいのかを確認するのにコストを必要としてしまう。その際、1 で記述したような Creative Commons が利用されているデータベースが存在すると、研究の促進にもつながるのではないかと考えたためである。
- 二つ目の理由は、利用者の拡大が見込めるためである。Creative Commons が利用されていると、法律の専門家でなくてもどのように利用すれば良いのかを理解することができる。したがって、一般人が Creative Commons で公開されている作品を使用して新たな作品を再び Creative Commons に公開するというサイクルが繰り返されると考えられる。そして作品の数が増えると Creative Commons について知らなかった人に見つかる可能性が上がり、利用者が増えていくと考えた。

参考文献

- [1] <https://creativecommons.jp/licenses/> 1/28 アクセス
- [2] <https://creativecommons.jp/category/features/features-science/> 1/28 アクセス